

ピタヤからミカンコミバエとウリミバエ発見

平成6年7月下旬から8月上旬にかけて九州でベトナム産ピタヤ生果実(サボテン科ヒロセウス属、別名「ドラゴンフルーツ」)からミカンコミバエが発見された。このため、植物防疫所では同国産ピタヤの輸入検査を強化したところ、8月9日に成田空港に輸入されたピタヤからミカンコミバエが、続いて8月12日、東京港大井埠頭にコンテナ貨物として輸入されたピタヤからもミカンコミバエと新たにウリミバエが発見された。

農林水産省はベトナム政府植物防疫機関に対し、わが国への輸出を自粛するよう要請するとともに、輸入関係者に対して説明会を開催し、理解と協力を求めた結果、8月18日以降、輸入が自粛された。

一方、横浜植物防疫所調査研究部においてピタヤに対する寄生調査を行った結果、マンゴウやニ

ガウリなどの好適寄主で生育させた場合と同様に生育することがわかった。

輸入検疫での発見事例や寄生性の調査結果などからみて、ピタヤは野外で両種ミバエの好適寄主



ピタヤの輸入検査

植物になり得ると判断されたため、農林水産省はミカンコミバエとウリミバエが分布している地域からピタヤを含むヒロセウス属植物生果実の輸入を禁止した。これまで、ピタヤが輸入禁止対象とされていなかったのは、中南米原産であり、両種ミバエが分布する熱帯・亜熱帯アジアへの導入と栽培の歴史

が浅く、寄生性に関する十分な調査・報告がなかったためである。なお、両種ミバエが発見されて以降、植物防疫所が主要海空港などにトラップを増設し、10月まで侵入警戒調査を実施したが、ミバエ類は発見されなかった。

海外のニュース

オウトウの新病害を伝搬するナガハリセンチュウの新種

線虫は、単独でも植物に被害を与えるが、それとは別に他の病原体と関連して様々な病害を引き起こす場合もある。わが国では、クワナガハリセンチュウがクワ輪紋ウイルスを媒介し、モザイク症状を引き起こすことが知られているが、最近、スイスで未知のウイルスを媒介するナガハリセンチュウの新種 *Longidorus arthensis* が報告された。スイス中部で栽培されていたオウトウに、枝葉のねじれや黄化のほか、節間が詰まり口ゼット状を呈する症状が現れた。この症状は raspberry ringspot virus (RRV) が病原となり、既知の線虫 *L. macrosoma* によって伝搬される Pfeffingen 病として取り扱われていた。しかし、この罹病樹から汁液を取り、検定した結果、RRV の抗血清には反応しないウイルスの存在が確認されたこと

から、未知のウイルスで、それを媒介する線虫も新種であることがわかった。

本種は、体長が約 6 mm で、唇部が体の外形とくびれがなく滑らかで、尾部は広くて丸い形をしている。しかし、唇部に陥入する 1 対の感覚器官が大きな袋状で、その底部が 2 分していることや雄が存在することなどから他種とは異なっている。

この線虫がウイルスを伝搬する能力は、同属の *L. elongatus* がトマト黒色輪点ウイルスを伝搬したり、*L. macrosoma* が RRV を伝搬する場合と同程度である。(Nematologica 40, 1994)

発行所 横浜植物防疫所
〒231 横浜市中区北仲通5-57 横浜第二合同庁舎 ☎(045)211-7155
発行人 大川 義 清
編集責任者 秦 二郎
印刷所 内村印刷株式会社